

豊田土地改良区資料室

調査団体名	豊田土地改良区資料室	団体代表者名	古川 彰
設立年	2015年(2008年)	対応してくれた人の名前	達 志保 室長、近藤文男(応援団)
団体URL	https://blog.goo.ne.jp/shidareyousui	調査員	清水雅子、安井雅彦
活動拠点	豊田土地改良区	レポート作成者	清水雅子
取材日	2018年12月18日		

活動内容

2008年、豊田土地改良区に“枝下用水130年史編集委員会”を設置し、7年をかけた編集作業により、2015年3月に『枝下用水史』(風媒社)を上梓した。しかし補助用水のことを書かなくては枝下用水の本当の水の苦勞を書いたことにはならないという理事長の思いを受け、続編執筆にむけて新たに豊田土地改良区資料室を立ち上げた。

『枝下用水史』を編集するにあたり、文字資料だけでなく、用水に関わってきた人々の声をふんだんに取り入れた。その方向性を失うことなく、地域内外の人々に枝下用水への興味を抱いてもらえるよう、ニュースレター『枝下用水日記』の発行やイベントをおこない、枝下用水への声を集めている。

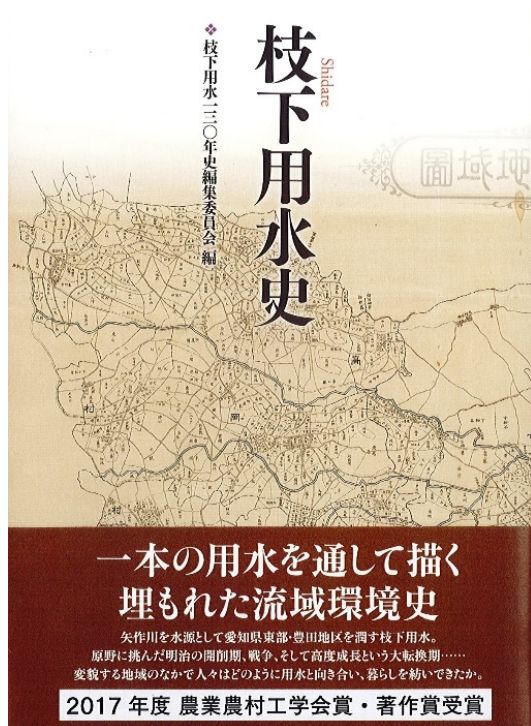
※枝下用水については、3ページ目の「(背景)枝下用水とは」を参照のこと

キャッチフレーズ

枝下用水を通して描く矢作川流域環境史をめざして

会のモットー(何を大切にしているか)

通常の用水史は、建設事業、中心者、行政の歴史に偏りがちであるが、『枝下用水史』は地域の人々が維持管理や水管理に関わってきた苦勞、用水を生活や遊びの場として利活用してきた風景などについても言及し、水源とする矢作川の流域環境史を編むことを目指している。そのため、できるだけ多くの人たちと関わり、私たちの枝下用水史にすることをモットーとしている。



『枝下用水史』



風情ある階段を上ると
豊田土地改良区資料室が現れる

設立から現在に至るまで変化したこと

“枝下用水130年史編集委員会”が2008年にスタートした時から数えると10年間、『枝下用水史』を上梓した以降も、地域へ飛び込んで取材をおこなっている。豊田土地改良区資料室への理解が広がり、地域内外から情報・資料提供が増えている。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田土地改良区、愛知県豊田加茂農林水産事務所、豊田市役所産業部農林振興室農地整備課、猿投台区長会、枝下町自治会、勘八峡山水会など

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、地域資源の活用など)

- ①資料室の前身となる“枝下用水130年史編集委員会”で枝下用水史編集に携わったメンバーは、農業や用水の専門家ではなかったが、編集作業を進めるうちに枝下用水の歴史、遺構、そして地域の方々の人柄に魅力を感じ、この仕事に生きがいを感じるようになった。その魅力を多くの人に伝えていきたいと思い、できるだけ枝下用水を歩く機会を作っている。
- ②『枝下用水日記』を季刊発行し、枝下用水のこと、地域の歴史のこと、資料室の活動のことなどを発信している。
- ③土地改良区職員や関連行政職員は日々の生活や業務に追われて、これまでなかなか旧水路を見る機会がないことに気づいた。「職員が現場に行く機会をつくろう」「より多くの方々に旧水路を知って欲しい」との思いから、旧水路までの整備と清掃を実施し、枝下用水の見どころ整備を少しずつ進めている。

現在直面している課題

豊田土地改良区のように資料室を設けて活動をおこなっているところは、全国的にも他にあまり例がない。また、『枝下用水日記』の発行が1,500部あることからわかるように、枝下用水に関わる人々だけでなく、枝下用水に興味を持ち応援して下さる方も地域内外に多くいる。ぜひ豊田土地改良区資料室を存続させたい。

今後やってみたいこと

現在、世界かんがい施設遺産登録申請の準備を進めている。そのためにも旧水路について調査をおこないたいが、越戸ダムに水没している部分は見えないため、現状では全容を解明できない。どうにかして水没部分の調査をおこない、その姿を明らかにしていきたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

矢作川漁協のご厚意で幾度か実現しているものの、舟がないために調査をしたい水没部分に近づくことができないので、協力して下さるところがほしい。



清掃活動の様子



地域住民への聞き取りの様子

その他、伝えたいこと

かつて矢作川には『月刊矢作川』という雑誌があった。創刊号に「私たちは①流域の生活と文化の歴史を発掘し紹介する、②流域の自然を守る、③矢作川水系の諸河川にかつての清流を取り戻す、④川を汚さず自然を破壊しない生活のあり方を考えるの四点を目標に、このたび、「月刊矢作川」を創刊しました。」とある。

1977年4月から毎夜集まり月刊で発行し続けたこの雑誌は、1985年7月に100号を数えて休刊した。発行責任者は当時枝下用水土地改良区事務局長・三浦孝司さんで、そのため資料室には幾分か『月刊矢作川』に関わる資料が残る。資料室ではこれまで貴重なデータベースとしてこの雑誌を活用してきたが、この雑誌をつくり続けた方々が元気づきにこの月刊誌にかけた思いの聞き取りをおこない、『月刊矢作川』101号を発行したいと考えている。いまこれからの矢作川の背景にこうした人々の不断の努力があったことを資料室として発信していきたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

達室長は豊田市の住民でないが、どうして枝下用水史の編集をしているのか。

<答え>

きっかけは縁あって矢作川研究所員になったとき、研究所を支える矢作川漁協の百年史『環境漁協宣言』はあるのに、豊田土地改良区の本がないということで、矢作川研究所研究顧問・古川彰さんと“枝下用水130年史編集委員会”を立ち上げ、事務局長を務めることになった。この仕事で初めて土地改良や用水に関わるようになった。

編集作業を進めていくなかで、枝下用水の魅力、用水の歴史を掘り起こしていくことの面白さに“はまって”しまい、いつのまにかライフワークともいえる仕事となったように思う。地元をはじめ、多くの方々に枝下用水の素晴らしさを知ってもらいたい。

取材者のコメント

取材者(清水)も仕事で土地改良区の方に触れ合う機会があったが、どの土地改良区の方も用水・排水を整備してきた先人の偉業をたたえその苦労を偲び、大切に語り継いでいる様子に感動してきた。

今回の取材で驚いたのは、『枝下用水史』では、編纂をそれまで土地改良区に関わってこなかった人に任せていることだ。そして、残された膨大な文献をひもときつつ、土地改良区の関係者(農業従事者)へのていねいな聞き取り調査を行い、単なる(枝下用水)土地改良事業の歴史だけではなく、“矢作川流域を形成する枝下用水”に関わってきた人々の暮らしをも描いている、農業用水を軸とした、まさしく“流域環境史”といえるものが出来上がったことだ。

取材後、『枝下用水史』を読ませて頂いたが、枝下用水が関係者の並々ならぬ熱意と努力で作られ守られてきた様子を、“モノ”から“コト”、そして“ヒト”へと光を当てていき、まるで物語を読んでいるかのような親しみやすさだった。私のような三河に土地勘のない一般人でも、読みやすくわかりやすいものであった。

このような史誌ができたことは、土地改良区の職員、編集者のご苦労はもちろんのことだが、この土地の人たちの気質がそうさせたに違いないと思うし、その気質をつくる風土:矢作川は、やはり、すごい。



枝下用水の水路にかかる太鼓橋
水路は岩盤を掘削して作られている
橋を渡ると同資料室へ行くことができる



本取材の様子
左から 達室長、近藤氏、安井氏
とても楽しそうに語り合っています

(背景) 枝下用水とは

【企業的用水経営】

枝下用水は矢作川を水源とし、主に菴川の下流地域から名鉄豊田線の西部を下り、豊田市役所から南部の田畑を潤しており、現在は豊田土地改良区が管理運営している。

用水建設は地域の長年の希望であり、明治16年(1883年)にようやく用水開削が始まった。しかしながら、当該地域は矢作川の河床より土地が高く、また水源とする矢作川の地質が岩盤であることから、難工事で予算が膨らみ公共事業として続かず、結局、西澤眞藏(近江商人)らが開削を進め企業的用水経営を行った。企業による用水経営は全国的にも大変に珍しい。

【厳しい自然条件】

その後、干ばつによる明治用水との水争いが裁判に発展、枝下用水側が敗訴したことを契機に、枝下用水の受益地域の人々が明治35年(1902年)に普通水利組合を結成、枝下用水の起業権を買収した。

当初は取水口が今より上流側(西枝下村)にあったが、昭和4年(1929年)越戸ダム建設に伴いダム堰堤での取水に変わったため、旧取水口とそこから矢作川沿いに続く約3kmの導水路がダム湖に水没した。

用水路建設には、人造石工法による樋門、水路護岸、木造掛樋など当時の最新技術が用いられたが、地震や台風、大雨による水路の決壊などに幾度となく見まわされており、厳しい自然条件がより一層、用水経営を困難にしていたようだ。

【地域の用水への想い】

なお、現在、用水区域内では西澤眞藏に関する顕彰碑や祭礼が各地にあり、建設の祖として西澤眞藏をたたえ感謝する様子から、地域の人々の枝下用水への想いが伝わってくる。

